

聖マリア国際協力ニュース

第 109 号

平成 21 年 9 月 1 日発行

JMTDR (国際緊急援助隊医療チーム) 中級研修に参加して

救急室 松竹留美子

私が「JMTDR 中級研修」に参加するのは、今回で 2 回目です。

私が救急医療に興味を抱ききっかけは、阪神淡路大震災の時でした。その当時は、将来は看護職を目指そうと考えていた時で、テレビの映像を見守るうちに、救急医療に興味を持つようになりました。それから看護師となり、聖マリア病院の救急室で働き始めました。そして平成 17 年に当院で JMTDR の導入研修が実施されることになり、これに参加するため JMTDR に登録しました。登録後は、メンバーを対象にした定期的な中級研修を受けながら、災害医療の知識・技術を習得しています。



グループワークの様相

平成 20 年の研修では「外傷医療」について、今回は「JMTDR における看護実践・発熱、呼吸器症状」について学びました。1 限目は、発熱とマラリアなどの病態整理について、2 限目は急性呼吸器症候群の診断・治療・診察の内容について、3 限目は、看護過程の展開について、実際の JMTDR で派遣された看護師の体験や事例に基づいて、グループワークを行いました。そこで、私がまったくも想像していなかった事例が取り上げられました。講師の方が、隊員として派遣されたときの話です。40 歳代の女性が呼吸困難を訴えて来られたのですが、バイタルサインに異常はなく、身体学的所見や臨床所見には異常は認めませんでした。そこでな

ぜ息苦しいのか尋ねると、その患者さんは、「家族が行方不明で心配でもう何日も寝ていない。またあんな災害がいつか起こるのではないかと不安を訴えられたそうです。私たち医療チームは、被災地では外傷の患者さんが多いため、診察・治療・処置をこなしていくのみに集中しがちです。ゆっくり患者さんの話に傾聴する時間的余裕はなかなかありません。しかし被災者の方々は、相当な精神的ダメージを受けているのは確かなことです。その女性は話を聞いてもらえたことで、精神的な安心感が得られ、息苦しさは改善し、「今日はゆっくり眠ることが出来そうです」と帰っていかれたそうです。この事例を聴いて、災害医療では精神的なサポートはとても重要な役割だと気付かされました。



グループワークに取り組む筆者(右)

今日まで、実際には私自身は JMTDR の隊員として派遣された経験はありませんが、災害医療の奥深さ、難しさをこの中級研修で学び、自分に何が出来るのかを考えさせられました。不幸にして災害が起こったときは、中級研修で学んだ知識を生かし、一人の人間として、看護師として災害医療の現場に赴き、被災者のケアをさせて頂きたいと考えています。これからも、看護師として救急医療・災害医療の知識・技術の向上に努めていきます。

ラオスでの協力活動を終えて

東京事務所 ISAPH 事務局担当 磯東一郎

JICA 草の根技術協力事業(以下「JICA 草の根事業」)の生き生き健康村づくりプロジェクトの支援のため、7 月 26 日から 8 月 8 日までの 2 週間、ラオスに派遣されました。今回は教育教材作成の推進、および ISAPH の故野田理事ご遺族からご寄付頂いた資金での研修センター建設の進捗確認が主な活動です。

の幹部です。まず水回りの工事を先行しなければなりません。11 月の乾季を待っての作業となるため、研修センターの着工は今年 12 月以降となります。一刻も早い着工を祈るばかりです。

まず研修センター建設についてですが、故野田先生は生前、聖マリア病院と ISAPH の連携で実施されている初期研修医のフィールド研修などの人材育成活動を高く評価されていました。その故人の遺志を継ぎ、ISAPH ラオスでは、スタディツアーでの研修や地元

教育教材作成については、JICA 草の根事業では栄養、衛生の健康教育が重要な柱です。しかしながら、ラオスでの保健教育手法は一般的に、対象者への理解を高めるための努力や工夫がなく、画一的で効果的な物とは言えません。教育レベルの低い者が多い村民への保健教育では、理解しやすく、楽しみながら学べるような工夫が大切であると考え、ラオス保健省、カムアン県保健局、郡保健局関係者に教材作成の重要性を説き、今後、共同で教材開発を進めることで合意を得ました。また実際に持参した教材を見せ、彼らの反応を確認しましたが、手作りの教材に強い関心を持ったようです。(※右頁へ続く)



大勢集まった住民たち

パネルシアターの実演



パネルシアターに見入る子供たち

パネルシアターの教材研究を推進している東京の道灌山学園保育福祉専門学校にご協力頂きました。雨続きで天候が心配でしたが、幸運にも実演を行う当日は雨が止んでおり助かりました。しかし住民保健活動のスケジュールの合を縫っての実演で、また言葉の問題もあり、現地スタッフや私、そして岩田リーダの通訳を交えての保健教育実演でしたから、非常に不安でした。

(※左頁より続く) 今回持参した教材とは、幼児教育などの現場で利用されているパネルシアターです。パネルシアターは、歌やお話を楽しむ貼り絵のお芝居のようなもので、最近では海外でも教材として使用されています。幸い今回の教材作成に当たり、

しかし、開始した途端にそれまでがガヤガヤと騒がしかった観衆が静かになり、パネルシアターに入っているお母さんや子供達の反応が確認できて安堵しました。受け狙いの仕掛け絵の場面でも期待どおりの反応が得られ、ぶっつけ本番であったにもかかわらず、非常に良い出来だったと思います。

今回の実演では現地スタッフのブンコン氏がよく頑張ってくれました。母乳栄養の話では、ブンコン氏が母乳の重要性を話すとき、ある母親の「私はいつも子供におっぱいやっているよ」という言葉に続き、「私は亭主にもやっているよ!」といきなり下ネタに落とされました。私も危うくその話に乗りそうになりましたが、岩田リーダに止められ羽目を外さず無事終了しました。

とにかく興味、関心を持たせる保健教育活動にひとつ近づいた思いがします。後は、現場の努力に期待致します。では、今後とも ISAPH の活動にご支援、ご協力をお願い致します。

国際小児保健医療協力入門セミナーに参加

救急診療科 矢野和美

6 月 27 日から埼玉県で行われた第 7 回国際小児保健医療協力入門セミナーに講師として参加しました。国際保健医療協力に興味があり、将来海外で活動を志している小児科医や学生を対象に、実際の国際協力の事例を基に海外での国際医療の問題点、基礎的な知識を学び、ワークショップを通じて実践的な医療活動の手法・考え方を習得する、名前どおりの入門セミナーです。



スマトラ沖地震での国際緊急援助隊に参加した筆者

私の他には、大阪大学の中村先生(日本の国際保健医療の草分け的な存在で、アジアでの母子手帳の普及に大変貢献されている先生です。)をはじめ、数名の講師の先生方がご自身の活動されてきた海外の小児保健に関する

が競い合い目標達成のために努力するようになり、その結果ヘルスセンターのサービスが改善し、村人のヘルスセンターへの評価が上がり、それが職員モチベーションをさらに上げていったというものでした。注目すべきことは活動が JICA のプロジェクト終了後も継続されていることです。海外医療支援では、費用のわりに現地で継続できないプロジェクトもあります。お金はかけなくてもちょっとした工夫で現地の医療従事者の意識を変えることができ、継続的なそして現地の人々医療サービスの質の改善につながるという点で、医療支援の在り方として大変参考になりました。

さて、小児科医対象のセミナーに、どうして救急の矢野が?と思う方もいらっしゃるかと思います。実は今回、「急性期から復興期までの継続的な災害支援の必要性」というタイトルで、今まで自分が参加した、イラン、アチエ、インドネシア、パキスタンなどでの医療活動を通じて、災害医療の基本知識、状況分析、活動の手法、急性期から慢性期までの医療ニーズにそった医療支援の必要性についてお話しをする機会を与えられました。また学生さんや若い小児科医の先生方、そしてベテランの先生方との国際医療協力に関する討論は大変刺激になりましたし、今後、聖マリア病院が行っている国際協力を活かせると思っております。



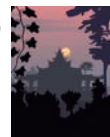
セミナー終了後の集合写真

スタディツアーのお知らせ

すでにご案内を差し上げておりますが、本年もラオスへのスタディ・ツアーを下記のように実施いたします。参加希望の方は 9 月 7 日(月)迄に所定の申請用紙を国際事業部までご提出ください。

尚、ご不明な点は国際事業部(内線 2385)までお問い合わせ下さい。

1. 日程: 11 月 3 日(火) ~ 11 月 8 日(日)
2. 募集人員: 4 名(看護職より 2 名、その他職種より 2 名)
3. 選考方法: 9 月 10 日(木)または 11 日(金)に面接試験を実施。



今月の動き

- 【派遣】
 - ・ 9 月 7 日(月) ~ 11 月 5 日(木)
 - 山崎裕章(国際事業部); JICA 結核対策プロジェクトのためインドネシア国へ派遣。
- 【受入】
 - ・ 9 月 24 日(木) ~ 11 月 13 日(金)
 - JICA 集団研修コース「病院経営・財務管理」を実施。10 カ国 10 名の研修員が参加。